

福島県の子どもたちへ「触れる地球ワークショップ」を通して伝えたこと
京都造形芸術大教授竹村真一さんから、結へのメッセージ
「新たな地球に生きる君たちへ」

8月7日（日）～12日（金）、静岡県御殿場市YMCA 国際青少年センター東山荘で一般社団法人プロジェクト結（ゆい）コンソーシアム（以下、プロジェクト結）がサポートする「アカデミーキャンプ実行委員会」は、アカデミーキャンプ2011の第一期を開催しました。福島県の小学校4年生から中学校1年生の子どもたち約40名が集まり、「学びのプログラム」「遊びのプログラム」「ディスカッションプログラム」など、個人の気づきとチームで参加するキャンプの楽しさの双方を感じることができるプログラムの数々を楽しみました。第一期の「学びのプログラム」では、京都造形芸術大学 竹村真一さんが、世界初のデジタル地球儀を使って、地球という星の不思議さ、すばらしさ、また未来にむけた私たち人類の課題を考えるワークショップ「“触れる地球”で生きている地球を体感しよう」が行われました。参加した子どもたちは真剣に立体地球儀に触れながら、竹村さんからのメッセージに耳を傾けていました。

子どもたちと一緒に行ったこのワークショップを記念し、竹村さんから特別に「プロジェクト結」に宛てて、「新たな地球に生きる君たちへ」と題した寄稿文を頂きました。竹村さんが子どもたちにワークショップを通じて伝えた想いは以下（次頁）の通りです。



（写真左、ワークショップで話をする竹村真一さん 写真右上・下、地球を触る子どもたち）

「エネルギーはタダ」の時代が来る！？

ワクワクするような未来が語られなくなって久しい。かつての鉄腕アトム、新幹線、未来都市・・・こうした夢を持てる話題が何もなく、子どもたちは「どうせ地球はもうおしまいなんだから」と無気力になっている。だが、そうだろうか？私はこんなに新しい未来を展望できる、ワクワクする時代はないと思っている。

たとえば太陽の恵みだけで石油も原子力もいらない、「エネルギーはタダ」の時代が本当に実現すると、20年前に誰が想像できただろうか？だが、いまや世界の自然エネルギーの総発電容量は世界の400基余りの原子力発電所のそれを上回り、EUは2050年までに電力を100%自然エネルギーで賄う計画だ。

パレスチナやイラクが紛争地域となったのは、20世紀初頭に中東の油田が発見されたことがきっかけだが、もう私たちは「石油をめぐって戦争をしなくてもよい」地球社会をデザインしうる地点に立っている。20世紀の石油文明という、ある一時代の都合で引き起こされた戦争、創りだされた民族問題なら、まったく新しい時代の文脈のなかでリセットすることも可能なはずだ。

そう、私たちは半世紀前の鉄腕アトムの時代と同じ強度で、「希望の地球」を語り、そのデザインに参加できる場所に生きている。

宇宙船地球号は「希望」に満ちた、祝福された星

さらに私たちはこの20年ほどの間に、宇宙のなかでの地球の「有難さ」を知った。宇宙探査が急速に進んだ結果、地球のような星（液体の水と多様な生命に満ち溢れた「水球」）が宇宙のなかでは極めて稀であること、宇宙人や地球外生命（ET）などはそうそう居るものではなく、私たち自身が稀有の「宇宙人」であることを理解した。

宇宙開発の最大の成果は、まちががなく「地球の発見」である。花が咲き鳥が舞い、人間という特異な脳が70億も存在し、言語というテレパシーで交信しあっている、この地球のありふれた風景が、宇宙的にみてどれほど「破格」なことであるか！膨大な太陽エネルギーの恵みもこの宇宙船地球号の「好都合な真実」の一つであり、光合成を起点とするこのエネルギーのクリエイティブな「捕獲と秩序形成」(In-formation)が、花や鳥や人間といったこの惑星のめくるめく知的・美的な遊戯へと昇華している。

私たちはこうして宇宙のなかでの地球と自己の存在の意味を知った初めての世代であり、宇宙船地球号がどれほど「希望」に満ちた、祝福された星であるかを語れる特権的な世代なのだ。

“3.11”震災後の新たな世紀を、「希望の地球」を語り、デザインし始める元年としたい

むろん日々の熾烈なビジネスや政治の渦中では、こんな感慨に浸っている暇はないだろう。だが、子どもたちや将来に希望を抱けない若い世代にとってはどうだろう？私たちの世代だからこそ語れる新たな世界像を語らず、小学校や幼稚園から地球の危機と人類の愚かさだけを教えるとしたら、そして現世代に生きる困難ゆえに、未来世代が持ちうるはずの希望（たとえば石油をめぐって争う必要のない時代を創りうる可能性）を封印しているとすれば、それは「子ども」という最大の投資対象に

対して、大人としてまっとうな責任を果たしているとはいえないのではないか？

人類は進歩したからではなく、その技術文明が「未熟」すぎたがゆえに地球環境を破壊してきた。だが、その自らの未熟さと宇宙のなかでの地球の尊さを知り、これまでとは違うモードで地球と共進化しうるくらいには成長しつつある。私たちの住居やビル群も、PV（太陽光発電：Photovoltaic power generation）や雨水を貯留する「さかさかさ（逆さ傘）」で太陽光や天水を捕獲する皮膜となれば、都市も森林と同様に「自然の一器官」として、この祝福された惑星の循環プロセスに創造的に参加してゆく資格を得るだろう。

“3.11”震災後の新たな世紀を、こうした「希望の地球」を語り、デザインし始める元年としたい。そして、こうした希望のビジョンを、何よりその主体となるべき福島子どもたちに届けたい。——これが私の「触れる地球」レクチャーを通じて届けたかったメッセージである。

地球観を深めるきっかけともなった今回の震災

今回の東日本大震災は、また別の意味で私たちの地球観を深めるきっかけともなった。

グローバリズムといわれ、経済でも情報でも地球規模のつながりが日常化しつつあるが、そこでの「地球的」という概念は単に二次元的な地球表面の、しかも多くの場合、人間空間に閉じたひろがりには過ぎない。そこには生きた地球のダイナミックな現実には内包されていない。

地球温暖化への関心の高まりから、低炭素化や生態系サービスの評価というかたちで人間の経済に「地球環境」を内部化しようという動きはあるが、そこでも考慮されるのは大気や海や森林という表層のレイヤーであり、地球内部のダイナミズムは、地震や津波などの突発的な災害時以外には意識されることがほとんどなかった。

だが実際には、海や森の「生態学的」な活動の根幹を支えるのは、地震や火山など変動する地球のダイナミズムであり（たとえば植物の生育には地球がもたらすリンなどの微量元素が不可欠だ）、それらを視野に入れない「地球経済論」は薄っぺらい脆弱なものとならざるを得ない。

日本の創世神話「古事記」には、こうした大地・地球のダイナミズムを世界観の根本に据え、それとの創造的共生の可能性を思わせるくだりがある。その神話は、女神イザナミが「国産み」の過程で最後に火の子カグツチを産み、産道を焼かれて病み衰えるが、その火山噴火のメタファーと推察される大天変地異の際に垂れ流した反吐や糞尿から日本の豊かな国土が出来たと語る。「私たちは女神の糞尿のなかで生きている（活かされている）」という壮大なビジョンは、しかし現代地球科学の観点からはきわめて妥当な宇宙観ではないか！？

地球のダイナミズムこそが地球を豊かな生命の星としている

従来の地球環境の概念は、多くの人にとってスタティック（静的）で安定したものというイメージであり、「変動」や「変化」をどちらかというとな異常な事態とみなして、それを（“温暖化防止”というように）抑える、あるいは避ける傾向が顕著だった。だが実際には、地球は「変動」「変化」を常とし、またそのダイナミズムこそが地球を豊かな生命の星にする前提条件でもある。地震や火山活動が豊かな大地をつくり、台風も海を攪拌して栄養豊かな深層海水を表面にもたらすことで、海洋と地球生命系をつねに活性化する役割を果たしている。

「災い」と「恵み」は同じ地球の現実の異なる相貌なのだ。だが今回の震災で白日のもとに晒されたのは、“地震国”と言いつつ、そうしたダイナミズムを真に私たちの文明の根幹に内部化し得てい

なかったという現実ではなかろうか。

生きた地球と共振しうるほどに強靱な文明ビジョンの再構築を

「地球環境」という概念そのものが、こうした地球のダイナミズムを包含したのものとしてブロードバンド化されねばならない。「気候変動」のみならず「地殻変動」まで視野に入れた骨太な地球観、生きた地球と共振しうるほどに強靱な文明ビジョンの再構築こそが、「変動帯」(＝地殻変動の激しいプレート境界ゾーン)に生きる日本人に託された課題であり、子どもたち(次世代の日本人)と未曾有の共感を寄せてくれた世界への応答責任(responsibility)であると思う。

単に「災害に強い国」「安全・安心のまち再建」に止まることなく、ダイナミックに震動しつづける「生きた地球」と共生＝共振しうる、柔らかくて強い文明創生の人類史の実験として、3.11 震災後の復興プロセスは構想されねばならない。地球レクチャーの最後では、「触れる地球」で地震や津波のダイナミズムもリアルに見てもらいながら、古事記の“糞尿神話”も読み聞かせながら、「災い」と「恵み」の相即性に関するこうしたメッセージも込めてみた。

壮大な宇宙やこの世のなりたちの根幹に対する知的想像力が最も際立つ小学校高学年を中心とした子どもたちに、しっかりと受け止めてもらえたという手ごたえが残った数時間だった。

=====
編集部付記:

なお、今回寄せられたメッセージの詳細は、「地球の目線」(PHP新書)に掲載されています。あわせてご参照ください。

竹村真一さんは、京都造形芸術大学教授 及びEarth Literacy Program代表で、地球時代の人間学を提唱するとともに、ITを活用したさまざまな社会実験プロジェクトを推進されています。世界初のマルチメディア地球儀「触れる地球」で、2005年グッドデザイン賞・金賞を受章されたほか、「100万人のキャンドルナイト」、ユビキタス携帯ナビ「どこでも博物館」、内閣府「日本改革前線マップ」などをプロデュースされ、愛・地球博でも、アフガニスタンやスリランカの子どもたちとリアルタイム対話を試みる「地球回廊」などを企画運営されました。

今回、竹村さんは、東日本大震災後の不安定な環境の中、屋外で心おきなく遊ぶ機会を少なくしている福島県の子どもたちを対象に開催された「アカデミーキャンプ2011」の主旨に賛同し、静岡県御殿場市のYMCA 国際青少年センター東山荘に「触れる地球儀」を準備し、子どもたちとのワークショップを実現させました。「アカデミーキャンプ2011」は、慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科、斉藤賢爾さんの呼びかけに端を発し、様々な大学・企業・団体の協力によって実現したもので、一期から三期を通じて約120名の福島県の子どもたちが参加しています。

【本件に関するお問い合わせ先】

- 一般社団法人プロジェクト結コンソーシアム 事務局 (担当: 荻原・福岡・上木原)
〒108-0073 東京都港区三田3丁目1-7 東宝三田ビル 302
- ・プロジェクト全般について ⇒ Email : info@project-yui.org
 - ・ご取材に関するお問い合わせ ⇒ Email : press@project-yui.org
 - ・ウェブサイト ⇒ URL : <http://project-yui.org/>